環境思想としての道徳哲学

ー価値の主観性をめぐってー

柴　田　健　志

はじめに

ヒュームが事実と価値を別々の領域に区別したことは，哲学史においてよく知られている。ヒュームによれば，善い／悪いというような道徳的な判断に代表される価値判断は，それに対応すべき事実をもたず，したがってその真偽を問うことができない性質のものである。ヒュームの考えでは，価値判断とはわれわれが事実に対して自分の胸の裡に抱く感情的な反応にほかならず，その意味で主観的であることしかできない。価値を主観的なものとみなすこうした主張に対しては，価値に客観性を認めなければならないという反論がもちろん存在する。価値とは感情のようなあやふやなものなどではなく，確固とした実在性をもつという反論である。私は本稿で，環境思想という現代の文脈のなかでこの対立の意味をとらえ直してみようと思っている。私は，価値を主観的なものとしてとらえるヒューム流の見方の方が，より説得力をもった議論でありうるという主張を展開するつもりである。「環境思想としての道徳哲学」という表題にはこのような意図が込められている。キーワードは「人間中心主義」である。まず始めに，議論の全体図を与えるために，このキーワードを中心にして，価値にかんする対立的な二つの見方を，環境思想という文脈のなかに位置づけておく必要がある。

環境保護の思想が決して避けられない問いとして「人間中心主義」がある。それは，環境を保護する理由が人間の福利にもとづいているにすぎないのではないか，あるいはまた，保護されるべき環境とは結局のところたかだか人間にとって好都合な環境にすぎないのではないかという論難である。人間の利益のために環境を破壊することがかつては「人間中心主義」として批判さ

れた。しかし，80年代からの環境倫理学の議論のなかで，環境を保護すること自体の質が問われ，環境破壊でなく環境保護に対して「人間中心主義」という語が用いられてきているという文脈がある[1]。例えば，環境保護の立場から原子力発電に反対する主な理由のひとつに，核廃棄物が未来世代の生活環境を汚染する可能性が主張されるが，この主張そのものは正しくても，やはり人間のためだけに自然を保護せよという主張であり，本来の自然保護ではないとされるのである。「人間中心主義」とは，このように環境保護思想に対する懐疑的な姿勢を表明する言葉である。無論，この言葉によって環境保護そのものが否定されているのではない。むしろ，「人間中心主義」をいう論者は環境保護には積極的である。というより過激ですらある。「人間中心主義」という批判の趣旨は，人間的な視点からの環境保護でなく，むしろ環境そのものに独自の価値を認め，その理由から環境を保護せよという点にある。このような主張は「ディープ・エコロジー」と呼ばれるが，ここで注目すべき点は，環境思想におけるこの対立が，価値に関する哲学上の古典的な対立とまったく同じ構図におさまっている点である。私の立場は，この文脈で価値の主観性を擁護することにある。そこで，「人間中心主義」という批判を行う側の立場を批判することから始めよう。

それを批判するには，生態学のごく基本的な考えを受け入れればよい。自然の事物はたがいに孤立して存在しているのではなく，むしろ相互依存しながら生態系といわれる全体を形づくっており，人間もまたそのような生態系のなかに埋め込まれた存在にすぎない。とすれば，人間的視点から独立した価値を自然に認めること自体，人間を自然という生態系の外部に位置づけ，そこから自然環境をみていることになる。パットナムは，哲学的な世界観として，世界の外に立って世界を鳥瞰する「外的(external)」世界観を「神の見方(God's eyeview)」と呼んでいるが[2]，これはまさにパットナムのいう「神の見方」のエコロジカル・ヴァージョンといってよい。しかし，たんなる世界観としてならともかく，エコロジーという知においてはこうした見方は許容されえないであろう。なぜなら，それは，たかだか自然の一部にすぎない

人間が，自分のためにではなく自然のために自然を護ってやらねばならぬという，傲慢な思想の表明と考えられうるからである[3]。

ではこれに対して「主観主義」の方はどうであろうか。価値が主観的なものにすぎないことを受け入れて，ただただ人間の福利のために自然環境を保護するという主張は，確かに狭隘に響く。しかし，その印象が確かであるとしても，それは決して「人間中心主義」として批判されるべき性質のものではない。むしろ，価値の客観性を主張する「ディープ・エコロジー」の方にこそ「人間中心主義」への傾斜が認められるのである。さらにいえば，主観主義は「人間中心主義」であるどころか，「人間中心主義」への対抗思想を秘めてさえいる。この三点が私の主張したいことである。これらの主張を納得のいく議論にするために，以下ではいくつかの観点からの敷衍を試みよう。まず始めに「人間中心主義」という言葉の意味内容を整理しなければならない(1)。次に，ヒュームに代表される「主観主義」には「人間中心主義」という批判は当てはまらないことを示した上で(2)，環境思想としてみられた「主観主義」が，むしろ「人間中心主義」への対抗思想となりうるということを示してみようと思っている(3)。

1　人間中心主義とは何か

人間中心主義という語の誕生は，歴史的にそれほど遠い過去の出来事ではない。例えば，フランスの『プチ・ロベール』辞典はこの語《anthropocentrisme》の初出を一九〇七年としている。同じ辞典によると，この語の形容詞形である《anthropocentrique》がそれより三十年ほど早く一八七六年の初出になっている。その定義は「人間を世界の中心とみなし，人類の善をすべての事物の目的因とするもの」である。この定義に出てくる「目的因」とは，アリストテレスが整理した四つの原因（形相因・質料因・作用因・目的因）のひとつであり，例えば建築という制作行為の「質料因」が木材や石であるのに対して，その「目的因」は人間の居住であるというように考えればよい。要するに，人間中心主義とはあらゆる事物が「人類の善」つまりは人間の福利と

いう究極目的のために存在しているという説であるとこの定義は述べている。ここでわれわれは，この語が十九世紀の終わりに登場したという事実の意味を問わねばならない。なぜならいまの定義に述べられているような考えは，キリスト教世界においてはもっと以前から存在してきたからである。そのような考えがこの時点で特に「人間中心主義」というような語を与えられなければならなかった理由は何であろうか。

これもやはりフランスから出ている『ダーウィン主義と進化』辞典には，「人間中心主義（誤謬）」という見出しの下に以下のような説明がある。短い文章なので全文引用しよう。

> ヘッケル『自然創造史』によれば，人間を「地上の創造の至高のしかも意図された目的であり，その他の自然物がすべてそのために創造された存在」とみなす誤謬。ヘッケルはこの「誤謬」を十六世紀にコペルニクスが破壊した天動説の幻想と類比的な関係に置いて，十九世紀において同じようにその誤謬を消し去ったラマルクを，「系統学的」転回を企てた立役者と認めた。

ヘッケルは，イングランドのハックスリと並んで，ドイツにおけるダーウィン主義の受容に積極的に貢献した進化論者である。この引用にあるように，ヘッケルはダーウィンとともにラマルクを高く評価していた。すなわち，人間がすべてのものの目的であるという「誤謬」を，ダーウィン以前に明るみに出したのがラマルクだというわけである。なお，「「系統学的」転回」という表現は，カントが自分の哲学をコペルニクスの天文学上の業績になぞらえ，それが後にカントの「コペルニクス的転回」と呼び慣わされるようになったという文脈を踏まえたものであろう。

これでなぜこの見出しが「人間中心主義（誤謬）」という，一見した限りでは意図の分かりづらいものになっていたのかがはっきりする。すなわち人間中心主義という語は，そもそもこの語で指し示される考えを誤謬として指

弾するために造語されたものだったのである。その造語を思いついたのがヘッケル本人であるか否かは詳らかではない。しかしいずれにせよ，十九世紀中葉以来，進化論を支持する一群の学者のあいだに，このような造語がいつ生み出されても不思議でないような思想的な文脈が形成されていたであろうという憶測は十分成り立つであろう。はっきりしていることは，それが誰による造語であれ，その意図が，天動説と同様に人間を世界の中心とみなす神学的幻想を破壊することにあったということである。そしてそのような認識をもたらしたのが，進化論という思想であった。したがって，「人間中心主義」の語を進化論のもたらした認識と切り離して考えるべきではない。

思想的なレベルで進化論がもたらした最も重要な認識のひとつは，人間と他の種との連続性の認識にあると考えてよい(4)。それは，人間は自然を超越した存在ではないという，より一般的な主張を含意するであろう。すると，人間が自然の生態系のなかに埋め込まれ，自然環境に大きく依存する形でのみ存在しうるという生態学的な認識は，進化論的な認識と通底する。そこで，環境思想の文脈においても，このもともとの意味で人間中心主義の語を使用すべきである。それをもっとも単純な形で定式化するとすれば，次のようなものになるであろう。——**すべてのものはただ人間のために存在する。**

2　主観主義は人間中心主義か

私は先に，自然環境の価値を主観的なものとみなす主張と，それを人間中心主義とみなす批判を紹介した上で，生態学的な認識を踏まえたとき，批判の前提になっている後者の立場そのものが成立しえないと述べた。ではこのことは，主観主義に対する「人間中心主義」という批判そのものが誤っているということをも含意するであろうか。私はもちろん含意すると考えている。以下ではこの点を議論しよう。そこでまず，「主観主義」と呼ばれる考えがどのような考えを指しているかを，ヒュームのテキストをもとに示し，それを単純な形に定式化した上でこの点を議論していこう。

ヒュームは『人間本性論』の中で道徳的な価値判断について次のように書いている。少々長いが引用してみよう。

> 何でもよい，悪(vicious)と認められている行為をとりあげてみよう。例えば，意図的な殺人。それをあらゆる観点から検分し，あなたが悪徳(vice)と呼ぶところの事実(matter of fact)あるいは実在的な存在を発見できるかどうか考えてみよ。〔中略〕あなたが対象を考察しているうちは，あなたはけっして悪徳を捕まえることはできない。あなたが反省を自分の胸の裡に向け，この行為に対してあなたの内にわき起こった非難の感情を見出すまでは，あなたはけっして悪徳を見出すことはできない。〔中略〕悪徳はあなたの内にあるのであって，対象の中にあるのではない。〔中略〕それゆえ，徳と悪徳は音，色彩，寒暖に比較されよう。これら後者のものは，現代哲学によれば対象の中にある性質ではなく，心の中にある知覚なのである[5]。

ヒュームは，「意図的な殺人」という具体的な例をもとに，それに対する価値判断（「悪徳」）について考察している。ヒュームの問いかけは，「殺人」という行為そのものが「悪徳」という性質をもっているという通念，一般化していえば，価値というものが「事実」として実在するという通念に向けられていることは明らかであろう。ヒュームは，そのような通念に反し，悪徳は事実としては存在せず，ただ「殺人」という事実に対する「非難の感情」としてのみ存在すると論じている。それは「対象(objects)の中にある性質」ではないという意味で客観的(objective)なものでなく，逆に「心の中にある知覚」であり主観的なものなのである。ヒューム自身は自分の立場を「主観主義(subjectivism)」とは述べていない[6]。しかし，ここでヒュームが主張している内容をそう呼ぶことは，ヒュームの意図に反したことではあるまい。そこで，この引用でヒュームが述べている内容を要約する形で，「主観主義」という立場を定式化してみよう。ヒュームは，価値（ヒューム自身の言い方

は「道徳的区別」）を「事実」に対置し，価値は「事実」と種類が異なるものであること，その実質は人間の「感情」であることを指摘している。この点から「主観主義」を定式化すれば次のようになるであろう。――**価値とは何らかの事実に対する感情的な反応である。**

ただし，ヒュームの議論を「主観主義」という用語で要約する際には，用語法から発生すると思われる誤解を避けるために，多少の注意が必要である。というのも，私は今後上のような意味でのみ「主観主義」という用語を用いていくが，この用語はこれとは別の，しかも特に断らない限り混同されやすい意味で用いられることがあるからである。A.J.エアは，この点をよく理解していた。彼自身の立場はヒュームとほとんど同じで，道徳的な価値判断を「感情の表現」とみなすものであるが，エアはこの立場を「ラジカルな主観主義」と呼び，彼が「オーソドックスな主観主義」と呼ぶ主観主義から区別しているのである(7)。私は，エアの議論の要点を押さえておくことで，「主観主義」という用語の二つの意味の区別を明確にできると思う。

オーソドックスな主観主義とは，「Xは悪い」というような道徳的な価値にかんする言明は，「私はXを承認しない」という言明に還元することができるとするものである。

ラジカルな主観主義とは，「Xは悪い」という言明は，それ自体として「X」に対する「たんなる感情の表現」であるとするものである(8)。
この区別が重要である。エアはこの点について次のように書いている。

> あるタイプの行為が正しいとか間違っているとかいうときに，私は何ら事実にかんする言明をしているのではない。それは私自身の心の状態にかんする言明でさえない。私はたんにある道徳的な感情を表明しているのである(9)。

もし「Xは悪い」という言明が「私はXを承認しない」という私の意見，つまりは「私自身の心の状態」についての言明であるとすれば，それは事実に

かんする言明の一種であることになる。私がXを悪いと思っていること自体はひとつの主観的な事実だからである[10]。事実にかんする言明である以上，真／偽が問われうることになる。これに対して，「Xは悪い」を「たんなる感情の表現」と解するなら，それにかんして真／偽を問うことはできない。エアの議論の趣旨は，オーソドックスな主観主義を批判し，ラジカルな主観主義を擁護することであるが，その批判の主要な根拠は，前者がわれわれの言語の実際の運用に反する説明であるという点である。「Xは悪い」というような規範的な語彙を含む言明は，はたして「私はXを承認しない」とうような規範的語彙を含まないたんなる主観的な意見についての言明として用いられているであろうか。エアはもちろんそうではないという。これは，規範的な語彙を事実に還元できないという立場にほかならない。道徳的な言明を「たんなる感情の表現」とみなすエア自身の立場は，このように規範的な語彙の特殊性を念頭においたものなのである。

さて，ここでの課題は，ヒューム＝エア流の「主観主義」の主張が，「人間中心主義」とはならないという点を示すことであった。「人間中心主義」という批判は，人間にとって有益である限りでの自然環境が保護されるだけでは，本来の意味での環境保護は成立しないとする批判である。一見すると正当な主張にも聞こえるが，問題は「主観主義」が「人間中心主義」をただちに意味するかどうかという点でなければならない。環境思想における「主観主義」とは，くり返しになるが，環境保護とは人間にとって有益である限りでの自然環境の保護という意味である。また「人間中心主義」とは，上で定式化したように，**すべてのものはただ人間のために存在する**，というものである。したがって問うべき問いは明らかである。——人間にとって有益である限りでの自然環境を保護するという主張は，すべてのものは人間のために存在するという主張を含意しているか。直観的に明らかなように，人間のために自然を護るということは，自然が人間のためにあるというような思想を内に隠し持っているわけではない。自然環境が人間という種の生存に適している（大気の密度，海水の温度，食物となる自然種等々の存在）という認

識は，自然がもともと人間の生存を目的として創られたというような認識とはまったく異なる。前者は人間を環境に適合した種の進化の結果として認識するのに対して，後者は人間を種の進化の目的として理解するのである[11]。後者は，目的論的な過程を「事実」とみなす。これに対して前者は，生存の指標としての自然環境の快適さ・食べ物の味等々の主観的感情をとおして自然をみている。換言すれば，自然環境からもたらされる結果をたんに享受しているだけである。したがって，人間が価値にかんしては主観の外へ出られないということは，環境思想の文脈では，自然の恩恵という思想にこそつながるのであって，「人間中心主義」というようなものにはただちに結びつかない[12]。

このように，主観主義的な環境保護思想に対する「人間中心主義」との批判は成立しない。その批判は，わたしの考えでは，「人間中心主義」という言葉の濫用にすぎない。すなわち，人間から独立した自然の内的価値に言及しないという点で，「主観主義」は「人間中心主義」との非難を被っているのであるが，ここで使われている「人間中心主義」という言葉は，人間の観点から自然をみているというだけの意味である。しかしくり返していえば，人間の観点から自然をみるということは，人間を自然の目的とすることではない。そして人間中心主義という言葉は，この後者の意味で用いなければ意味をなさないのである。

3　反＝人間中心主義としての主観主義

自然環境の保護とは人間の福利の観点からなされる活動であるという主張のもつ狭隘な響きは，ここまでの議論ですでに幾分かは払拭されたのではなかろうか。それを十分納得のいくものにするにはさらなる敷衍が必要であるとしても，その点は別の機会に譲り，次に「主観主義」という立場をより詳細に吟味してみよう。環境思想には少なくともひとつの危険が潜んでいる。その危険にここでとりあえず命名しておくとすれば，関係主義である。危険とは，「人間中心主義」を招く危険という意味である。私は以下で，ヒュー

ムの哲学がこの危険を聡明にも回避する論理を内蔵していることを示してみたいと思う。そしてそこからさらに，「人間中心主義」の対抗思想として「主観主義」を位置づけてみようと思っている。

関係主義とは，価値の起源を関係という客観的なものに見出そうとする議論を指している。この議論は，事物そのものに価値を帰属させないが，そのかわり事物と事物の関係に価値の起源を見出しうるとするものである。関係とは，とりわけ人間身体と自然との相互関係にほかならない。単純な例を挙げれば，魚は人間によって食べられるというのはひとつの関係である。この場合，魚は人間にとって価値あるものである。すると魚の生息する海洋もまた人間にとって価値あるものと考えられる。こうして価値のネットワークは様々な方向へ拡張しうる。魚それ自体に価値があるのではない。海洋それ自体に価値があるのでもない。人間身体と魚との関係に価値があり，さらに魚を中間項として人間と海洋との関係に価値が見出されるのである。こういう考え方は，一見すると生態系という考え方と調和するようにみえる。しかし，このような考え方には重大な盲点がある。それはおそらくそうとは知らず「人間中心主義」への一歩を踏み出してしまっているのである。

自然の生態系が人間の予測をはるかに越える形で連鎖していることは，今日ではすでに一般的な認識である。例えば，レイチェル・カーソンの『沈黙の春』には，セージブラッシュという雑草を化学薬品で駆除した結果，どのような事態が生じたかが紹介されている。アメリカのセージブラッシュ地帯では，それを食べるキジオライチョウがあっというまにいなくなっただけでなく，小川の岸に生えているヤナギが枯れ，さらにヤナギのしげみにすむアメリカヘラジカが消え，ヤナギを食べるビーバーが消えた。ビーバーがいなくなると今度はビーバーが作るダムのおかげで生息するマスが消える。こうして人間には何の害もないセージブラッシュを恣意的に駆除したことで，人間は人間にとって豊かな環境をいっぺんに失ったというわけである[13]。こういう関係のネットワークは，自然全体に拡張して考えることができるであろう。すると，価値があるのは自然という生態系全体であるとうことになる。

そして現実に，人間がその価値の一端を享受している。問題はここにある。それは，自然全体が人間に福利をもたらすような仕方で配置さているという主張へと容易に逆転されうる。すなわち，「人間中心主義」をもたらしうるのである。

関係主義に潜む危険とはこのようなものである。この危険は，関係の認識と価値の認識を混同してしまっていることに存する。ビーバーのダムによってできた泉でのマス釣りは，人間にとってたしかに有意義な時間であろう。そしてその楽しみはたしかに自然の複雑なネットワークが可能にしたものであろう。しかし，われわれはマス釣りを成立させている関係を認識することでマス釣りを善と判断しているのではない。われわれはただたんにマス釣りを楽しむのである。マス釣りが自然の複雑なネットワークのなかで可能であるということと，それが価値あることであるということは別問題である。

ここでヒュームのテキストを参照しよう。ヒュームの道徳論の関心はもっぱら人間社会に絞られており，その議論がいわゆる環境思想の領域にまで踏み込んでいるわけではない。しかし価値の主観性の議論と同様に，関係にかんするヒュームの議論も，一般化して環境思想の文脈へ移しかえることは可能である。ここで言及するヒュームのテキストは，「理性」を「道徳の唯一の源泉」とする考えが誤った考えであることを示すことが議論の眼目であると明言された上での議論の一部である。ヒュームは道徳の源泉が主観的な「感情」にあるという彼自身の立場から，それを「理性」すなわち「感情」でなく認識によって説明しようとする議論が失敗していることを示そうとしている。

ヒュームによれば理性の判断が及ぶのは「事実(matter of fact)」か「関係(relations)」かのいずれかである[14]。そこでヒュームは，道徳的な判断においては「事実」も「関係」も現実には認識されていないことを示さねばならない。ヒュームは，「忘恩(ingratitude)」[15] を例にとって次のように議論を進めている。「忘恩」とは，自分に行為を示してくれた人に対して冷淡であったり悪意を示したりすることを指しているが，では「忘恩」と呼ばれる事実

はどこにあるのであろうか。あるとすれば，恩知らずな人の心にある冷淡さや悪意であろう。しかし冷淡さや悪意それ自体がただちに「忘恩」という「非礼な行為」[16] となるわけではない。それらは，あくまでも自分に行為を示してくれた人物に向けられるとき「忘恩」と呼ばれるのである。ここから，ヒュームは次のように結論づける。

> したがって，忘恩という非礼な行為は，何らかの個別的な独立した事実ではなく，複雑な事情の絡み合いが第三者に示されたとき，その人の気質のせいで，それに対する非難の感情がわき起こるというところから生じるものであると結論づけることができよう[17]。

このように，ヒュームにとって「忘恩」とは何らかの事実を指す名辞ではなく，非難の感情を表明するものにほかならない。この議論は，道徳的な価値判断は感情の表現そのものにほかならないという，私がすでに述べたヒュームの根本的立場が敷衍されたものとみることができる。重要なのはこの次の議論である。

この議論に続いて，ヒュームは「忘恩」がある種の関係に存するという主張を退けている。この議論に注目しなければならない。ヒュームが想定する主張はこうである。ある人物のなかに好意を見，続いてもう一人の人物のなかに悪意を見るとする。するとそこには「不一致(contrariety)」[18] という関係が成立していることになる。忘恩とはこの関係のことであり，したがって理性によって認識されうるという主張がここから出てくる。これこそがヒュームが退けようとしている主張なのである。ヒュームの論法は，今の主張とは逆に，ある人物が私に対して悪意を示し，かつ私がその人物に好意で報いたとき，そこにはやはり「不一致」の関係が成立するが，この場合私は「忘恩」のかどで非難されることはないだろう，というものである。ヒュームがここから詰論づけることは，道徳的な価値判断は関係の認識に還元されず，やはりわれわれは「感情の判定」[19] に訴えざるをえないという点である。

関係にかんするヒュームの議論の論点は，道徳的判断が何らかの関係のなかで成立しているとしても，その関係はあまりに複雑であり，それゆえそのような関係の認識が道徳的判断となると考えることはできないという点にある。

> 道徳的に評価される行為，例えば忘恩のような非礼な行為は，複雑な対象である。道徳はその諸部分の相互関係に存するというのであろうか。ではいかにして，どんな仕方でだというのか。その関係を特定してみよ，それにかんするあなたの主張をもっと個別的にもっと明白にしてみよ。そうすればそれが誤っていることにたやすく気づくであろう[20]。

われわれが現実に道徳的判断を行っている世界は「不一致」というような単純な関係によって成り立ってはいない。われわれはわれわれをとりまく状況の複雑な絡み合いをつねにたどり尽くしているわけでもない。にもかかわらず，われわれは現に道徳的な様々な判断を行っている。このことは，道徳的な判断が関係の認識によって成立するものではないということを示している。道徳的判断は，やはり感情からくるのである。これがヒュームの議論の趣旨であろう。

では，このような議論を環境思想の文脈へ移しかえたとき，どのようなことがいえるであろうか。人間が自然の複雑な網の目のなかに存在しているとしても，自然の複雑さは人間の認識をはるかに越えている。われわれに認識しうるのはたかだかその一部分だけであろう。人間が自然全体の生態系を個別的に視野に収めることなど不可能であるといわねばならない。にもかかわらず，われわれは多様な種を含む森林や海を価値あるものとして認めないであろうか。認めているとすれば，それらの価値は認識にもとづくと考えるより，むしろ感情の表現であると考えた方が納得がいく。ヒュームの議論を環境思想へと応用するとこのようなことになる。重要な点は，ここから「人間中心主義」への対抗思想が導き出されうると考えられる点である。

われわれが自然に認める価値は人間的なものであるという点は認めてよい。問題は，この点を認めることが「人間中心主義」をもたらすかどうかである。価値判断を感情としてとらえるヒュームのようなタイプの「主観主義」からは，「人間中心主義」は出てこないというのが私の論点である。この点は上ですでに触れておいた論点であるが，関係主義との対比を経た上で，ここでもういちどその内容を吟味することによって，その含意をいま少し明瞭にしたいと思う。自然が人間にとって有益なものであること，このことはいくつもの異なったレベルで確認しうることである。そのひとつのレベルに，レクリエーションということがある。庭に巣をかけておけば何種類もの鳥が集まってくるような環境は，すでに都市では得難い環境であるが，そのような環境は人間にとって価値あるものである。その価値の実質が喜びの感情にあるということは，ヒュームの議論にもとづいて主張しうる。では，この議論から，鳥の多様な種は人間を喜ばせるために存在するという結論が出てくるであろうか。価値の実質が内的な感情にあるという議論の重要な論点は，それを生み出した原因の探求を価値にかんする考察の外においているという点にある。価値とはわれわれに与えられた一個の所与であるが，われわれはなぜそれが生じたのかを究極的に知り得ない立場にある。われわれはただ，喜びの感情を享受しているというにすぎず，われわれにそれをもたらしたと考えられる自然は，ただ一般的にそのような恩恵をもたらした原因としてのみ表象されうるであろう。このような表象が自然に対する畏敬の念へ発展することはあっても，人間中心主義的な自然像をもたらすことはありえない。むしろ，自然そのものに価値があり，その複雑な網の目のなかに人間が置かれているという関係主義こそ，一見生態学的な認識であるかにみえて，じつは「人間中心主義」を含意している。なぜならそこでの自然とは，人間的な価値によってあらかじめ包み込まれてしまっているからである。そこには人間的な価値，人間的な欲望など入り込む余地のない，一方的な贈与の主体としての自然ではなく，人間と対等の位置に置かれた自然しかない。人間と自然が対等である，——これは傲慢な思想というべきではないだろうか。

これが，「主観主義」が含意すると思われる「人間中心主義」への対抗思想である。この点をさらに敷衍し，私の考えをさらに明確にすることは別の機会に譲る。このような基本的なアイデアをスケッチし終えるだけで，すでに十分多くの言葉を費やしてしまったからである。ここでは最後に，「主観主義」のもうひとつの重要な意義に触れてこの考察をひとまず閉じたいと思う。

おわりに

価値にかんする「主観主義」は，人間の主観的な欲求にしたがって自然をどのように処置してもよいというような思想をいささかも含意していない。本稿で私が最も示したかったのはこの点である。逆に，主観主義から帰結する教訓は，われわれにとって価値あるものを，われわれはただ享受することができるだけだという点である。この点からさらに，環境保護のような実践的な問題への思想的根拠づけを導き出すことができる。環境保護が必要なのは，大規模な環境破壊が現になされているからにほかならない。環境破壊とは，特定の産業の利益のために，官民が結託して生態系を修復不可能な状態にまで破壊してしまう行為を指す。それは昆虫や魚類，動植物の種の絶滅を意味している。これに反対するためには，魚や動物がいなくなるということが，人間の食料がなくなるということを意味するというような根拠だけでは不十分である。それなら，人間にとって安全な環境破壊は許されることになる。しかも，こういうことが了解されると，今度は「安全」の基準が極めて恣意的に決定される可能性があるということは容易に想像されうる。事実，レイチェル・カーソンが『沈黙の春』を書いた時代には，ディルドリン等の極めて毒性の強い化学薬品が「安全」であると信じられていた。したがって、もしこれだけの根拠しか提示できないのなら、「主観主義」などにほとんど意味はない。しかし逆に，自然の事物そのものに価値があるがゆえにそれを保護するというような考えは人間には不釣り合いであると思われる。自然の卑小な一部分にすぎない人間に，自然の庇護者をもって任ずることは許されない。では，自然環境の保護を支持する根拠はどこに見出されうるであろう

か。私は，「主観主義」が人間の価値を徹底的に受動的なものと見なしている点を重視すべきであると思っている。例えば，魚や動植物は人間の食料となり，その意味で間違いなく人間にとって価値あるものである。しかし，このように人間にとって価値あるもの自体は，別に人間が作り出したというわけではない。魚を養殖することはできても，魚を生み出すことは人間には不可能である。それらはいわば自然からの贈与としてあると考えなければならない。いったん絶滅させてしまった種を再生することは不可能なのである。それなら，人間がそれらを勝手に破壊する権利などない。芸術家が自分の出来の悪い作品を処分するのは芸術家の自由である。それはもともと自分が作ったものなのだから。しかし，人間が作ったわけではない自然の種を人間が勝手に処分する権利などないというべきである。

このように，「主観主義」は自然に対する人間の関係を徹底的に受動的なものとみなすことを含意しており，そこから環境保護を支持する思想的根拠を導き出すことができると考えられるのである。

文献

Ayer, A.J. [1936], *Language, Truth and Logic,* Penguin Classics, 2001

De Chardin, T. [1955], *Le Phénomène Humain,* Ed. Seuil

Hume, D. [1740], Selby-Bigge(ed.)*A Treatise of Human Nature,* second ed. by Nidditch, Oxford UP, 1978

——[1777], Selby-Bigge(ed.)*Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals,* third ed. by Nidditch, Oxford UP, 1975

Kemp Smith, N. [1941], *The Philosophy of David Hume,* Macmillan

Midgley, M. [1978], *Beast and Man the roots of human nature,* Routledge, revised ed., 1995

Putnam, H. [1981], *Reason, Truth and History,* Cambridge UP

——[2002], *The Collapse of the Fact/Value Dichotomy and other essays,* Harvard UP

Rachels, J. [1990], *Created from Animals the moral implication of darwinism,* Oxford UP

Stevenson, C. L. [1963], *Facts and Values studies in ethical analysis,* Yale UP

Weston, A. [1992], *Toward Better Problems,* Temple UP

——(ed.) [1999], *An Invitation to Environmental Philosophy,* Oxford UP

レイチェル・カーソン[1962]『沈黙の春』，青木訳，新潮文庫，一九六四

スティーヴン・ジェイ・グールド[1983]『ニワトリの歯—進化論の新地平—〔下〕』，渡辺・三中訳，ハヤカワ文庫，一九九七

DICTIONAIRE du DARWINISME et du L'EVOLUTION, sous la direction de Patrick Tort, PUF, 1996

LE PETIT ROBERT 1, nouvelle éd., 1989

注

(1) Weston, A. [1992], pp. 101-107, Weston, A. [1999], pp. 69-80

(2) Putnam, H. [1981], pp.49-50

(3) この問題点にかんする優れた考察として次を参照。Weston, A. [1992], pp.107-114

(4) Rachels, J. [1990], pp.129-172

(5) Hume, D. [1740], 468-469

(6) 歴史的には，もともとシャフツベリの用語である「モラル・センス(moral sense)」という言葉を用いた「モラル・センス学派」という呼称の方が適切であろう。実際，ケンプ＝スミスによれば，「シャフツベリ，ハチソン，バトラーは，モラル・センスの説を主張する点でみな一致」しており，ヒュームは自身をその系譜に位置づけているのである。Kemp Smith, N. [1941], pp.18-19

(7) Ayer, A.J. [1936], p. 112-113

(8) *ibid.*, p. 112

(9) *ibid.*, p. 110

(10) スティーヴンソンは，ヒュームの説をこのように解している。すなわち，ヒュームは「Xは善い／悪い」という命題を「～はXを承認する／しない」という命題に還元したのだという。Stevenson, C. L. [1963], pp.11-13. するとヒュームは，価値判断を事実判断の一種と認めていたことになる。スティーヴンソンの解釈は正確ではない。しかしこの点についてはすでにパットナムの的確な批判が存在するので，これ以上深入りはしない。Putnam, H. [2002], pp.150-151

(11) このような思想の代表者は，いうまでもなくテイヤール・ド・シャルダンである。De Chardin, T. [1955]. スティーヴン・ジェイ・グールド[1983]は，テイヤールの人間中心主義を進化論の様々なタイプの中に位置づけようと試みている。七八ー九二頁。

(12) メアリー・ミジリーは，「すべてのものはわれわれ〔人間〕のために作られた」という人間中心主義の思想を「誇大妄想」と断じ，それに対抗して「われわれ〔人間〕が世界のために作られた」というスローガンを提示している。Midgley,M. [1978], p.195. 私は，こういうスローガンに特に共感するわけではない。目的論的な配置のなかで人間と自然の関係を逆転させているだけだからである。問うべきなのは目的論という構えそのものである。

(13) レイチェル・カーソン[1962], 八七-九四頁。

(14) Hume, D. [1777], p. 287

(15) *ibid.*

(16) *ibid.*

(17) *ibid.*, pp.287-288

(18) *ibid.*, p. 288

(19) *ibid.*

(20) *ibid.*